
降り積もる梅雨

露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

降り積もる梅雨

【Zコード】

Z6632T

【作者名】

露

【あらすじ】

記憶喪失の少年と誰かを探している少女。

思いがけない出会いは新たに起きた事件の前兆だった。

このお話はポケットモンスターBWから3年後という設定で進んでいます。正直なところ勝手な都合が多くすぎると思います。

因みに、これは作者の初投稿の作品となつてあります。読みづらい部分もあると思いますが、ご了承下さい。

嵐の夜中（前書き）

初投稿となります。

嵐の夜中

「くつ……！」

ある激しい嵐の夜。雨は強く、雷も鳴るとある森の中で少年は走っていた。相当息をきらしながら。

そんな少年を追い、青年が走る。殆ど全力疾走のように見えるが笑つていいところを見るにまだ余裕のようであった。

「フツ……、逃がせん」

青年はモンスター・ボールを手にとつて走る少年の前にポケモンを出した。

しかし、出されたポケモンは普通と違つ雰囲気が出ていた。機械の如く冷たいように見え、田は何を見ているのか分からない。正氣を失つている……、その言葉がぴったりであった。

「フローゼル、やれ！」

少年の目の前に現れたポケモン、フローゼルは青年の言葉を聞くと体に水を纏い、彼に向かって素早く突進してきた。

少年は素早く体を動かし、その攻撃を避ける。

「くそつ、イーブイ！」

少年もボールからポケモンを出す。フローゼルよりいくらくか小型で

可愛らしい容姿のポケモン、イーブイはフローゼルに向かって突進していく。フローゼルはそれに気づき素早くその場から離れる。イーブイも急ブレーキをかけ、フローゼルと対峙する。

「全くもって愚かな奴だ。フローゼル、ハイドロポンプ！」

青年の言葉を聞くとフローゼルは口から大砲の如く水をイーブイに向けて発射する。しかし、イーブイはそれに当たると同時に吹っ飛びことなく、霧のようにその姿を消した。

「何！？」

「今だ！ 行け！！」

少年は不意をつかれた青年の一瞬の隙を見逃さなかった。彼はどこにいるのか分からぬ自分のポケモンに指示を出した。それと同時にフローゼルの足下が少し崩れ、そこからイーブイが現れた。イーブイは穴から出てくる勢いを利用してフローゼルの体制を崩す。そのままフローゼルを目で捉え、逃がさなかつた。

「シャドーボール！」

イーブイは待つてました、いわんばかりにすぐに口元に黒いエネルギーの球体を作り、それを発射した。それはフローゼルに当たった。

フローゼルはそのまま瀕死、つまり、戦闘不能となつた。

「フツ、やはりな…………。これは素晴らしいー」

青年は不敵な笑みを浮かべ、続けて言う。

「やはりお前は私達に必要なようだ。」

少年は後ずさりしつつも辺り一帯に響くよじり言つた。

「ふざけるな！ 誰がお前達のような奴等のところに戻るか！ 生き物を、研究と詮つねで弄ぶ、そんなところはもうめんどい！」

少年は意識が朦朧としてきたのか、だいぶふらつこっていた。

しかしその瞬間、稻光がその辺り一帯に強く広がつた。

光が消えたときにはもう既に少年の姿は見えなかつた。

「チツ、ビニへ消えた…………？」

青年はその場から姿を消した。

嵐の夜中（後書き）

いつも、初めまして！ 露と言います。
初心者で下手くそですが、これからよろしくお願いします。
では、よろしければ、感想をお願いします。

晴れの日の便り（前書き）

前話をプロローグするなりばれ、この話は一話目です。

晴れの日の優しさ

イッシュ地方。そこは3年前にプラズマ団というポケモン解放とう名目の上のその地方の制圧を日論んだ組織があつたところだつた。しかし、旅立つて数ヶ月の少女を中心にその組織は崩壊を余儀なくされた。

その後、その組織の7人の賢者のうち、6人が国際警察に捉えられたが、残りの1人を未だ捉えることができていない。

また、その組織に崇められていた（正確には利用されていた）少年も未だ行方不明。

そんなこんなで組織崩壊から3年が過ぎようとしていた。

激しい雷雨のあつた次の日、その少女はヤグルマの森を歩いていた。彼女が歩いているところは舗道されたところではなく、獸道ともとれる天然の迷路と呼ばれるところを歩いていた。……平然と、スタタスタ。

そんな彼女があるところで足を止めた。止めざるを得なかつた。彼女の目の前には多少濡れている少年とイッシュ地方では珍しいポケモン、リーフィアがボロボロな姿で倒れていた。

「な、何!? これは…………いつたい?」

少女は相当驚いている。これを見て驚かない人は非常に少ない、と思う。

少女は少年の鼻の近くに手を当てた。弱くではあったものの、息を感じていた。

「大丈夫。まだ、生きてる！」

先程まで多少焦っていた少女ではあつたが、生を確認して落ち着きを取り戻し、大型の鳥ポケモン、ウォーグルを出した。

少女はまず少年を背中に載せ、その後リーフィアを載せてから自分も乗った。

「ヒウンシティに。……急いで！」

少女の言葉にウォーグルは頷くと力強く羽ばたいて上空へと上昇した。その後、近くに見えていたイッシュ地方最大の都市、ヒウンシティに到着した。

* * *

少女はその後、病院へと彼等を連れていった。

幸い、外傷はそれ程酷いものではなく、リーフィアも少年もすぐに回復した。しかし、少年のほうは意識のほうが未だに回復しておらず、入院することになった。

「大丈夫かなあ、彼……」

心配なのか、少女は病院に残ることにした。

そして3日後、とうとう少女が田を覚ました……。

晴れの日の優しさ（後書き）

次回は少年と少女の名を明らかしたいです。

では、感想待つてます！

記憶不明（記憶喪失）

ちゃんとつまんでできてるかが心配です。

でも、どうだいー。

「あ、気がつきました？」

少女が少年の目を覚ました」とこぼり、「ベッドに近づく。

少年のまほほは目を少しキョロキョロさせてくる。少し辺りを見回して少女が目にに入ったのか、彼女は見ていた。

「あの、大丈夫ですか？ 森で倒れていたときは吃驚しましたよ。外傷もそう酷くなかったのでよかったです」

少女は笑顔で少年に言った。

（倒れていた？ 僕が？）

少年は少女の言葉を聞いて頭の中の記憶を探ろうとした。

「私、如月ホワイト、って言います。あなたは？」

少女、ホワイトは自分の名前を言つと少年に名前を訊ねた。

（僕は……あれ？ 思い出せない？ そんな……。でも……）

彼は頭の中で記憶をさらに奥深くにまで探りつとした。しかし、どこを探しても結果は同じであつた。

「…………誰？」

少年の出した答えはホワイトの問い合わせのものになつていなかつた。

「え？」

「僕は……誰？ 何で……倒れていたの？」

少年の目は何を見ているのか分からぬ。

ホワイトは彼の様子を見て一つの結論を出した。

記憶喪失……といづもの。

その後、ホワイトは幾つか質問したが、知識だけは残つていて、肝心の過去のエピソードが消えていた。

「あの、もし分からないならあなたの持ち物から探していいですか？」

ホワイトが少年にそう訊ねると彼はすぐに頷いた。

彼女は彼の持ち物を一つ一つ丁寧に確認していく。その中にあつた身分証明書にあたるトレーナーカードを見つけて、それに書かれていた名前や年齢を見ていた。

「ふうん。あなた、黒崎レイ、っていう名前なんだ。年齢も殆ど私と同じなんだね！」

年齢を確認するとホワイトは敬語止めて少年、レイに話す。

レイと呼ばれた少年のまつは特に気にしている様子はなかった。

「…………あなたのリーフィア、すっかり回復して元気になったよ。…………と言つてもあなたは何があつたのかは覚えてないんでしょうけど…………」

「え？」

ホワイトはそう言つてリーフィアの入ったボールをレイに渡そうとする。しかし、彼は何故か動きが止まっていた。

「どうしたの？ あなたのポケモンよ」

「え、ああ…………。ありがと」

彼はお礼を言つてボールを受け取つた。

その後、記憶以外には特に障害を見られなかつたので、次の日には退院した。

（一体、誰なんだろう？）

退院して外に出たのはいいが、彼は自分のことに未だ疑問を持つていた。

そんな様子を見ていたホワイトは彼にある提案を持ちかけた。

「ねえ、私とバトルしない？」

彼女の提案はあまりにも唐突なものであつた。

記憶不明（後書き）

やつと、キャラの名前が出せました！

ホワイトはB/Wの女主人公がモデルです。

レイのほうはオリジナルです。モデルはありません。

始まりのバトル！ ダイケンキ▼Sグレイシアー！（前書き）

バトル描写は難しいです

書いているうちに混亂しちゃう……

その上密巻の説明も全く出来てないし

今回は少し長めです。どこで切れば良いのか分からなっちゃった
ところが多かったです

始まりのバトル！ ダイケンキ▽Sグレイシア！！

「…………は？」

あまりに唐突すぎたのか、レイの思考は停止した。

「あ、いや…………。バトルすれば何か思い出すかもしないじゃない？ 嫌なら別にいいけど」

相手がトレーナーだと分かっているからこそきけること。

ポケモンバトルというのは本来は自分や相手の実力を計つたり、トレーナーとポケモン、トレーナー同士等が交流を深めたりするためにあることではあるが、何かしらのきっかけを作るにはいいことかもしれない。

「うん、…………いいよ」

レイが了解を出すと二人は広場まで移動した。

* * *

「じゃあ、いくよ！」

ホワイトが声をかけるとレイは頷いた。そして二人はボールを投げてポケモンを出した。

「頼んだよ、ダイケンキ！」

「頼むよ、グレイシア！」

ホワイトはダイケンキ、レイはグレイシアをそれぞれ出す。2体が着地するとバトルが動き出した。

「ハイドロポンプ！」

先に動いたのはダイケンキ。口から大砲の如く水を発射する。それはものすごい勢いでグレイシアに向かった。

一方、そのグレイシアは不思議な光を身に纏い、水を反射させてダイケンキに跳ね返した。それがダイケンキに当たる。

(え……?)

ホワイトはダイケンキの心配やグレイシアの出した技には疑問を持たなかつた。指示もなく動いたグレイシアに対して疑問を持つていた。

「一体、何が……」

「れいとビーム！」

レイの指示を聞くとグレイシアはすぐに氷のエネルギーをビーム状に口から発射し、それをダイケンキに当てる。ダメージ自体は少ないが、足下が凍りついていた。

「な、何！？」

考え事の最中だったのか、ホワイトは未だ状況を飲み込めていない。

「はかじこつせん！」

ホワイトはレイの言葉を聞いて現実に戻る。

グレイシアは既に青白いエネルギーを口に貯め、ビーム状に発射していた。

「ハイドロカノン！」

焦った状態のまま、ホワイトはダイケンキに反撃の指示を出す。しかし、ダイケンキが口に水のエネルギーを貯め出した頃には既にグレイシアのビームが直撃していた。

次にダイケンキを確認出来たのは、戦闘不能のときだった。

「…………お疲れ」

ホワイトはそれだけ言つてダイケンキをボールに戻した。

一方、レイとグレイシアは戯れていた。

ホワイトはそんな彼等に近づいていった。それに気づいたレイはホワイトに視線を向ける。

「あなた…………、何者なの？」

先程のバトルで疑問を持ったホワイトはそれを素直にレイにぶつけ
る。

「……」

レイは黙り込んでしまった。そして考え事を始める。何か思い当た
るようなことが頭の中に浮かびかけてきていたが、すぐに消えてしま
った。

「……分からな
い」

「……え？」

「分からないんだ、僕も……。何か思い当たる節があつたんだろ
うけど、でも……」

「何も思い出せないの？」

ホワイトが先に結論を言つとそれにレイは頷く。

少し間を置くとホワイトはまた質問する。

「じゃあ、これからどうするの？」

その質問にもレイは黙り込む。しかし、先程とは違つてすぐにまつ
きとした答えが出てきた。

「自分を探す」

「……え？」

「自分を探す旅に出る。自分がどういった存在なのか分からないまま生きていくよりも、ちゃんと自分のことは分かつていたほうがいいから。例え、それがどんなに過酷なものであつたとしても……」

レイの言葉を聞くとホワイトは驚きはしたが、微笑んだ。

「せつか。じゃあ、私もついていっていい？」

ホワイトの言つてることに今度はレイが驚く。声は出でていながらそれは表情を見るだけで明らかであった。

「あ、別に嫌ならしいのよ。私は単にある人を探してるだけなの。もう3年くらいになるけど…………。それに、私は色んなところに行つたことがあるからあなたの手助けにもなると思うんだ」

それを聞くとレイは笑い出した。

「な、何で笑うのー?」

「いや、君つて面白いな、って思つて。別に構わないよ。手助けなら欲しいこといろいろだつたし」

レイの答えを聞くとホワイトはまた微笑み、歩き出した。

「どう?」

「ヤグルマの森。あなたはそこ倒れてたのよ。そこに行けば多少は自分のことが思い出せるかもよ?」

レイはそれを聞くと頷いて彼女について行つた。

これはまだ、始まりである。今後起こりうることの始まりにしかすぎなかつた。

この一人の、出会いは……。

始まりのバトル！ ダイケンキ▼Sグレイシア！！（後書き）

ポケモンの世界におけるバトルは基本的にそういうものだと私は勝手に解釈しています。実際にどうだかは知りませんが……。

多少長くはなりましたが、感想のほう、お待ちしています！

これはかなづぶつ壊れてこぬと思こまゆ（注…）これは注意事項と舞合設置であります。

この話はかなりぶつ壊れています（注・これは注意事項と舞台設定です）

～まずは注意事項～

- * 原作キャラの関係が壊れます。
- * 原作キャラが多少壊れるかもしだれません。
- * 時系列が原作通り（？）ではありません。
- * 話の関係上、あちこちを飛びます。

* バトルは少なめです。

* ポケモンより人間トレーナーが中心です。

～続いて舞台設定～

このお話をイツ シュ地方におけるプラズマ団の事件、崩壊・壊滅から3年経過した話です。

出てくる方はそれぞれ原作の舞台となつた各地方（おそれべ全て）となります。

「」の話はかなづぶつ壊れてこぬと思こぬや（注・「」されは注意事項と舞合設列でナ

「」んな話ですが、今後ともよろしくお願ひします！

何かでれば今後増えるかもしません。

やつちやつた感あります、気にせざること思こます。

あなたを見つけた場所（前書き）

本日一一度目だつたりします。

何だか寂しい気がします。
： 色んな意味で。

あなたを見つけた場所

「リリがヤグルマの森。あなたが倒れていたのはもう少し先のまづ
」

レイはホワイトに連れられて歩いていた。

二人はヒウンシティを出た後、約1時間程歩いてヤグルマの森に着いた。彼等が歩いているのは舗道されたところではなく獣道のようなどころであった。

「ねえ、本当にこんなところに倒れていたの？」

「うん。信じられないでしょ？ けど」

二人はさらに歩く。彼等はやがてホワイトがレイの場所に辿り着いた。そこは、他と特に変わったようなところは見られなかつた。

レイはその場にしゃがみ込んだ。

「どう？」

黙り込んでいるレイにホワイトは訊ねる。

「……」

「…………

「…………何か言つてくれない?」

あまりに何も言わないでいたのか、ホワイトは苦笑してしまう。それでもレイは黙り込んでいたのだが、何かに気づいたのか口を開いた。

「「」「誰かと戦つた…………」

「え?」

「そのとき使つていたポケモンは、確か…………」

「リーフィア、じゃないの?」

途中で話すのを止めたレイは考え込む。ホワイトはそんな彼にそのとき一緒に倒れていたポケモンの名前を言つが驚いたことに首を横に振つた。

「じゃあ、何のポケモンなの?」

「分かんない。でも、リーフィアではなかつた気がするんだ……」

レイはそう言いつつもリーフィアをボールから出した。その様子を見ていたホワイトは疑問に思った。

(じゃあ、何でリーフィアを出したの?)

彼女は苦笑しつつもレイとリーフィアを見る。

リーフィアは辺りを見渡すと何かに感ずいたような雰囲気を出した。

「もしかしたら、リーフィアは何か覚えてるんじゃない？」

ホワイトがそう呟つとレイもそう思つたのか、リーフィアに訊いてみる。しかし、リーフィアのほうは首を横に振つた。

「やうか。じゃあ、ボールに戻つて」

レイはやう言つてリーフィアをボールに戻した。

「何も分からないまま、か……」

様子を見ていたホワイトがそう呟くと彼女のケータイが鳴りだした。彼女は通話ボタンを押すと電話先の相手と話し出した。

「…………もしもし？」

「あ、ホワイトー？ 元気にしてた？」

「シロナさん！」

ホワイトは電話先の相手の女性をシンオウ地方のチャンピオン、シロナと確認するとそのまま話し続けていた。彼女達が知り合つたのはホワイトがシンオウ地方に行つたときだつた。

「一体どうしたんですか？」

「いやね、あなたが少し前に言つていた黒崎レイ君のことなんだけ

ど、少し分かつたよ

「本当ですかー!？」

「ええ。そのレイ君はカントー地方の出身で生後たつたの数ヶ月でヤマブキシティの孤児院に入れられたらしいの。だけど彼が3歳のとき、その孤児院が爆発したんだって。幸い、怪我人が出なかつたみたいだけど、行方不明者が1人いるの。未だその人は見つかっていないんだけど、その行方不明者の名前が黒崎レイなんだって。名前が同じだし、もしかしたら何か手がかりが掴めるかもしれない。こっちでももう少し調べてみるから分かり次第連絡するね」

「分かりました、ありがとうございます！」

ホワイトは話を聞き終えると電話を切つた。そして、未だ考え方をしているレイに近づく。

「あなたに関する情報が少し入ったよ」

「え？」

「場所はカントー地方のヤマブキシティ。あなたがいたかもしれないところよ。行ってみましょう?」

ホワイトの言葉に少し間を置くが頷いた。

あなたを見つけた場所（後書き）

意味不明なことばかりな気がしてならないです。

ケータイのことですが、普通に携帯電話だと思つてくれれば構いません。ポケギアとか使おうと思いましたが、結局こうなりました。

では、感想お願いします！

何だか珍しい（前書き）

文化祭が終わりました。

今日は代休で毎過ぎまで寝てました。準備や後片付けで疲れたのか、昨日はおかしくなりましたが……

何だか珍しい

数日後、彼等は船を漬かつてカントー地方に到着し、ヤマブキシテイに着いた。彼等はその街を歩いていた。レイはキヨロキヨロと見回していた。ホワイトは地図を見ていたが、彼の様子が気になつたのかレイを見る。

「高い建物とか気になるの？」

「うん。 じゅうの、あんまり見たことないような気がして……。それに、じゅうの見ているとあまり外に出ていた気がしないんだ」
レイはせつまにひつひつ、あちこちを見回し続ける。そのまま本当に周りが物珍しい、といづべきものであった。

ホワイトは少し顔を歪ませた。

「…………ねえ、やつやつてキヨロキヨロするの止めてくれない？
周りにも迷惑だし、じゅうが恥ずかしいから…………」

「え、ああ」

彼に言つとホワイトは再び地図を見始めた。

暫く歩いて一人はある大きな建物の前で立ち止まつた。

「おおむね」

ホワイトは地図を閉じて続けて言ひ。

「……が、あなたがいた孤児院が建っていた場所よ」

そこは、十年程まえに再建された孤児院。

二人はその建物に入つていった。中は清潔感に溢れていて、整備が行き届いていて、設備も充実していた。

中では子供達がはしゃいでいた。小さな幼児からレイ達と同じくらいの子供、それよりも大きな人達もいた。

殆どの人達は元気にはしゃいでいるが、中には元気のない人もいた。

「…………いっぱい、いるわね…………」

ホワイトはその数に驚き、悲しんでいた。

一方、レイは少し落ち込んだ様子であった。

(似て……。何かは分からぬけど似てる…………)

悲しみに満ちた目で辺りを見ていた。

少ししたとき、レイは足下に何かがこすりつけられるようなものを感じた。それに気づき足下を見るとそこにはイーブイがいた。

「あら、可愛いイーブイね。ここにはポケモンもいるのね」

ホワイトも気づいてしゃがみ込む。レイはそのイーブイを抱き上げ

た。イーブイは喜びを表すようにレイに甘えてきた。

そんな彼等にレイと同じくらいの少年と少女が近づいてきた。一人もそれに気づく。

「へえ、そのイーブイが人に甘えてなつくなんて珍しいな」

少女がイーブイを指さしながら言つ。

「確かに、オレ達と同じくらいの子供がそのイーブイとよく遊んでいたなあ。最も、その子自身は他のポケモンとも打ち解けていたけどな」

少年がそう言つとホワイトは彼等に質問し始めた。

「その子供、何て言つてました？」

その質問を聞くと二人は顔を見合させて、少し間を置いて答えた。

「さあ？ 名前はあまり聞かなかつたわね」

「でも、十年前のこの施設の爆破事件のときから行方不明だ、つて聞いてるな。2、3年くらい捜索したらしげけど、結局見つからなかつたらしいね」

「そう、ですか……」

二人の答えを聞いてホワイトは手掛けりを掴みかけてたが、少し落ち込んでしまった。

「わあ～、すゞ～…！」

「IJの兄ちゃん、ポケモン達にすゞくなつかれてる…！」

「ポケモンを手玉にとつてゐたーい…！」

3人が会話していると少し離れた所にポケモンや小さな子供達がレイの周りに集まり、戯れていた。

「ちょ、くすぐったいよ～……」

レイは笑いながらそいつが実際は相当苦しいんを見えた。

「すげえな、ありや…………」

「ポケモン専用のモテオーラでもあるのかしら？ 少し羨ましいわね…………」

「…………って、そんなこと言つてゐる場合じゃないです！ 早く彼を助けないと…！」

苦笑しながらも呆氣いとられていた一人にホワイトは突っ込みを入れた。そして3人はレイ近づいていった。

レイは何とかしてボールを一つ取り出して、そこから1匹のポケモン、ピカチュウ（丸みを帯びた尾の形からしてメス）を出した。

「ピカチュウ、IJのIJ達をビリヒカして～…！」

ピカチュウは呆れて溜め息をついた。しかし、すぐに彼の周りに集まっているポケモン達に指示を出していった。

ポケモン達が、レイから離れいった。

「いや、晴れ間が見えません

「え？」

「は？」

「嘘つ！？」

ピカチュウの指示によって動き出したポケモン達。ホワイト達3人は驚いた。

ポケモン達はまだレイの近くにいるが、それでも先程のように纏わりついてはいなかつた。

レイはとこりと、先程の状況から解放されて深呼吸していた。ピカチュウはレイに近づいて首を傾げる。

「サンキュー、ピカチュウ。助かつたよ」

レイがお礼を言つた。ピカチュウはそのままを向いて鼻で溜め息をついた。

「すういな……」

「うん。あれだけのポケモンを一瞬にして動かすなんて……」

少年と少女は呆気にとられていた。

ホワイトはレイに近づいてしゃがみ込む。

「大丈夫?」

「うん。死にかけたけど…………」

未だに深呼吸しているが、だいぶ落ち着いてきたレイを見てホワイトは安堵の息をついた。

「にしても、何でこんなにポケモンが集まってきたんだろ?」

「それ、僕が訊きたい…………」

レイは一番に疑問に思っていたことを先に言われ、ホワイトにジト目を向ける。ピカチュウまでホワイトにジト目を向ける。ホワイトはその一人と一匹の視線に目を合わせられなくなり、別の方向を向いていたが、それでも痛みを感じ取っていた。

(この二人、あまりにも視線が痛すぎる!)

視線を外していたはずのホワイトだが、物理的攻撃でもうけているのでは、と思える程に痛さを感じていた。

「にしても、何でポケモン達はレイ君に近づいたのかしら?」

少女の言葉にハツとして、二人はポケモン達に視線を移す。

よく見るとポケモン達はレイに対して目をキラキラ輝かせて見ていた。

「何だか、僕が来るのを待っていたみたいだね」

レイの言ひ方二人は頷く。

三人はすぐにポケモン達を別の場所へと移した。レイも手伝おうとしたが、先程のようになつても困るのでその場から動かすにいた。

「でも、レイは以前ここに来たことがあるのか？」

全ての移動が終わると少年がレイに訊く。

「そう、みたいです」

「みたい？ ビウ！」とだ？」

「…………」

「彼、記憶喪失なんです」

黙りこんでしまったレイの代わりにホワイトが言い出した。

「そして、十年前の爆破事件のとき、行方不明になつた人です」

「えつ！？」

「そつなのか！？」

「はい。しかし、その後のことがよく分かつていません。手掛かりを見つけようとここへ来たのです」

二人はただただ驚くばかりであった。

「君が、 そうなの？」

「らしいです。 よくは知りませんが……」

「しかし悪いな。 オレ達は何も知らないんだ」

「でも他の人にも訊いてみたら？ もしかしたら、 誰かしら覚えて
いる人もいるかもよ？」

二人に言われてレイとホワイトは顔を見合させて頷いた。

* * *

しばらくした後、 二人は孤児院を出てベンチに座っていた。

「結局、 特にこれといった情報は得られなかつたわね……」

レイは黙つて頷く。

あの後、 二人は色々な人に話を訊いたが、 十年前のことだったの
か覚えている人はそいうなく、 彼の手掛かりも見つけられなかつた。
しかし、 行方不明者が見つかって心配してくれている人もいた。

「まあ、 覚えているほうがおかしいかもしねないけどね」

「それもそっか」

二人は空を見上げる。 空はあまり晴れ間が見えず、 雲がだんだんと

黒くなっていた。

「問題は、手掛かりはまだゼロ、といつことね」

レイはまた黙つて頷いた。

雨の日と雨の朝

その日、雨が降り出しきたので、一人はヤマブキシティのポケモンセンターの宿泊施設で一泊することにした。そのある一室でホワイトは外の様子を見ていた。レイはグレイシアの毛繕いをベッドの上に座つてしていた。

「雨、今日も強いわね……」

レイは毛繕いの手を止めるとホワイトに視線を向けた。グレイシアは彼の膝から降りて先に受けっていたピカチュウとリーフィアのいるところに行つた。

「今日、もう？」

レイが訊ねるとホワイトは彼と向き合つ。

「ええ。あなたを見つけた前日の夜、その日も雨が降つていたのよ

.....

そう言ってホワイトはレイの隣に来て座る。

「まあ、相當強く降つていて、雷も鳴るくらいこの風みたいなものだつたけどね」

ホワイトはレイの様子を伺う。彼は考え事をしているようだった。田の前ではレイのポケモン達が既に寝息をたてていた。

「……お？ 何か思い出せない？」

ホワイトに訊かれてもレイは黙つたまま考え事に耽つていたが、暫くして口を開いた。

「…………」

「…………」

ホワイトは黙つたままレイの言葉に耳を傾ける。

「…………、走つてた氣がする。戦いもしたけど何かを失つた……、そんなことがあつた氣がする」

「ふうん。じゃあ、ヤグルマの森で何かを失つたってこと？」

ホワイトの質問にレイは首を横に振る。

「確かにその日のこともあつた氣がするけど、もっと前にあつたような…………、そんなかんじ」

レイは更に考え方をする。ホワイトも黙り込む一方であつた。

「…………私、先に寝てるね？」

「ん、分かった」

ホワイトは髪止めのゴムを外してベッドの中に入り込んだ。

レイはその後も考え続けていた。

* * *

数時間後、未だ雨の降り続ける夜中にホワイトは田を覚ました。

「ん~、まだ夜中の1時過ぎ……」

時間を確認し、田をこすりながら隣にあるベッドを確認した。しかし、そこには誰もいなかつた。

「…………レイは？」

辺りを見回し、バックや上着があり、ポケモン達がいることを確認する。

「どう行つたんだろ?」

ホワイトはベッドから降りて傘を持って部屋を出た。

* * *

「一体どうしているのよ~?」

ポケモンセンターから出て30分程経つただろうか。まず、街中を軽く探したが見つからず、街の外に出てきていた。そう遠くには行つてない、と信じながら。

「全く、せめて書き置きぐらいしてほしかつたかも…………」

文句をブツブツ言しながら歩いていた。

その時、少し遠い所から音が聞こえてきた。

「…………何の音かしら?」

疑問と興味からホワイトはそちらに移動する。

「ほーら、もう大丈夫だよ」

「…………え?」

ホワイトが来たのは小さな池。そこにいたのはレイと包帯を尾に巻いた二四口モ、そして数匹の仲間と思われる群がいた。

「後は無理をしない」と。下手をすれば悪化に繋がるからね

レイの言葉に二四口モは元気に返事して他の仲間と一緒に池に戻つていった。

レイは立ち上がり振り返ると後ろにいたホワイトに気づいた。

「……」

「……？」

そして、二人は驚く。

「…………」

「…………」

二人は黙り込んだままだった。

不思議な能力（ちから）

二人とも驚きの表情のまま黙り込み、突つ立っていた。

「…………取り敢えず戻らない？ 雨も降っているし、このままだとあなた、風邪ひくよ？」

沈黙と静寂を破るようにホワイトは呟くように言つ。レイは頷いてそのままポケモンセンターに戻つていった。

* * *

部屋に戻つた後、先にホワイトがシャワーを浴びた。その後、レイが浴びる。

レイはシャワーを浴びている最中、そこにある鏡で自分の裸体を見ていた。そのとき見えた自分の左胸にある傷に気づいて、それに触つていた。

「…………何だらか、これ？」

今まで気づかなかつたのか、初めて見つけたかのような疑問を持つた。

「気にして意味はない、かな？」

誰に問いかけても無駄で仕方のないことだ、と決めつけて、考えるのを止めた。

* * *

レイが浴室から出て服を着るとすぐにグレイシアとリーフィアにベッドの上に押し倒された。

「あはは、くすぐったいよ~」

一人と二匹はそのままじやれあつてていた。もう片方のベッドの上でその様子を見ていたホワイトは微笑ましく思い、見守るように微笑んだ。ピカチュウは未だに眠っている。

「…………そろそろいいかしら?」

ホワイトが言うとじやれあいをしていた一人と二匹は止める。リーフィアとグレイシアはベッドから降りて静かに寝息をたて始めた。レイはそのままベッドの上に座る。一人は向き合うような形になった。

「で、何であんなところに来たんだ?」

レイが先に口を開いてホワイトに訊く。

「それは私が訊きたいわよ! 私はただあなたを探しに行つただけ!
! ポケモンセンター内にも街中にもいないから外に出てさがした
あそこにいた、というだけだよ! !」

ホワイトは叫ぶように少し大声で叫ぶ。レイは煩いと感じたのか、耳を塞ぎながら聞いていた。

「煩い。もつ少し音量を下げる……」

ホワイトは慌てて口を塞ぐ。恥ずかしかつたのか、頬が紅潮していくのが目に見えて分かった。

「で、僕が何故あんなところに行つたか、だけぞ」

レイは耳から手を離し、ホワイトの様子を無視して話を続けた。

「声が聞こえたんだ……」

「…………声？」

ホワイトは話を聞きながら口から手を離す。そして、すぐに疑問をぶつけた。

「そりゃ、声。最初は何だらう、と思つて聞いてみたんだけど、“痛い”とか“助けて”とか聞こえたから気になつて外に出たんだ。そして声のするほうに行つたらあそこに着いた、ってわけ。あの二ヨロモ、怪我していたから治してあげたんだ」

レイは先程のことを全て言つた。ホワイトは頷きながら聞いていた。

「ふうん。世の中には不思議なことがあるものね」

「…………？」

ホワイトは一人で納得し、そのままベッドの上に寝転んだ。

レイは疑問に思つたが、確かに不思議なことだと思い、ベッドの上

に寝転んだ。

不思議な能力（ちから）（後書き）

ネタバレといつづの次回予告。いや、次回予告の時点でネタバレか
(笑)。

次回は時間がかなり飛びます。「ア承下わい。

氣持ち、そして変化（前書き）

お久しぶりです。

「」のお話はネタバレ要素が含まれていますので、「」注意ください。

あと、「」のお話で「」の章は終了となつます。

気持ち、そして変化

それから、一週間程の月日が流れた。一人は特に手掛けがないまま、ある森に来ていた。

「あの～、ニニ～、ビニ～？」

「……」

彼等はその森の中で立ち止まっていた。レイは切り株に座り、ホワイトは地図を開いて近くに立っていた。

「ねえ、ニニ～、ビニ～？」

暫くしてレイはまた訊くが、ホワイトは黙り込んだままだった。

「あは、あは、あはははは……」

やがて、不気味な笑い声をあげるよくなつた。

「……どうしたの？」

その笑いがあまりにも不気味に思つたのか、レイは引きつった表情になり、引き気味になりながらも彼女にさらに訊いた。

「じめん、迷つちやつた……」

ホワイトが地図の画面表示を見せながら言つ。そこには“ERROR

R”と記されていた。

「…………はあ？」

それを見たレイは呆れていた。

「ホントに…………『めん』

ホワイトさうつむこてしまつた。

田の前で落ち込んでいるホワイトを見てレイは溜め息をついてある提案を出した。

「ウォーグルで空から探してみるのは？ これだけ晴れていれば空からでも探しやすいだうし」

それを聞いたホワイトは顔を上げてなるほど、と思い、ウォーグルをボールから出して指示した。ウォーグルは頷いて上空に上がって姿を消した。

「…………暇だ」

その様子を見ていたレイは呟くように言った。一方、ホワイトはその場にしゃがんでボールからゾロアークといふポケモンを出すと、毛繕いを始めた。彼は気持ちよさそうに田を開じて鳴いた。

(わういえば、彼はビーハンでいるんだうひへ…)

ゾロアークを毛繕いしながらホワイトは今探している彼のことを考えていた。しかし、ある疑問も生まれた。

(最近、彼のこと考えてなかつた気がする……)

何故、と思つた彼女だが、理由は全く思いつかなかつた。

その彼とは3年前、ホワイトがまだ旅立つた頃に出会つた。そのときのホワイトは彼を変な人だと思つたが、その彼と何度か会う度にある気持ちが募つていつた。それは当時は分からなかつたが、彼と最後に戦つた時に分かつた。しかしその彼は、ホワイトが偶然にも巻き込まれた事件を引き起こした組織に利用されていた。その終結のとき、ホワイトは彼からあるポケモンを受け渡された。彼はそのままどこかへ消えてしまい、未だに消息が分かつていない。

ホワイトはその後、その彼を見つけるために各地方を回つた。しかし、見つかることは一切なかつたが、それでも彼女は彼のことを思ひ続けていた。

……はずだつた。

ところが最近、レイと会つてからといつもの、彼のことを考えたことがあまりなかつた。あんなに思い続けていたのにも関わらず、ホワイトは今の今まで考えたことがなかつた。

毛繕いを止め、ホワイトは不思議に思つて暇そうにしているレイを見た。ゾロアークは一旦体を伸ばすとボールに戻つた。

ホワイトはレイを見ながら今までのことを思い出していた。特にバトルのこと。その強さは彼女が見てきたどのトレーナーよりもはるかに上であった。しかし、それ程強いトレーナーなのに今まで彼の名前を聞いたことがなかつた。その強さは一体どこで身につけたのか、ホワイトは疑問に思う一方であつた。

そしてもう一つ、疑問が生まれていた。

(私は彼をどう思っているんだろう?)

少なくとも嫌いではない。これは確かだつた。だが、好きといつに何かが足りない気がした。

ホワイトはこれ以上は考えたくない、とこうように目を閉じて首を横に振り、レイを見た。そしてどこか痛むような感覚を覚えた。

(今は……何?)

分かりたいような分かりたくないような…………、そして、彼に変化が訪れないようにと何故か考えるホワイトであつた。

(フフッ、何を思つているのかしら?)

自分の思つていることがバカらしいと考え、心の中で笑つてしまい、空を見上げた。

「あ、ウォーグル！ 戻ってきたのね」

そこには丁度戻ってきたウォーグルがいた。レイも空を見上げて彼がいることを確認する。一人は立ち上がってウォーグルの後をついて行つた。

暫くして二人は森を抜けた。ホワイトはウォーグルにお礼を言い、ボールに戻した。

「見て、町だよ。」

レイは前方を指差して言った。そこはある程度ビルが建ち並んでいた。

「よかつた……、ありがとうね！」

レイは笑顔でホワイトに言った。彼女はそれを見て顔を赤くしてうつむいてしまった。

「どういたしまして」

ホワイトはレイの先を歩いた。そのことを不思議に思ったレイは首を傾げたが、すぐに彼女の後をついていった。

気持ち、そして変化（後書き）

久々の更新でした。

次話から新章になります。何だかポケモンをあまりだしていなかつたような気がしますが……。

まだ、分からぬまま……（前書き）

さて、このお話から新章に入ります。そしてこのお話からゲームのこと�이다. がだいぶ絡んできます。

この章はゲームをもとにしたオリジナルの話となっています。そのため、納得出来ない！と思われるところもあるかもしれません、「ごめんなさい」。

では、スタート！

まだ、分からぬまま……

二人が出会いつて1ヶ月が経とうとしていた。然し、それでも分からぬままであった。

これは、そんなときに二人がある人物と出会い、そして今、三年前のことに本当の決着・終止符が打たれようとしていた……。

* * *

二人はイッシュ地方に戻つて今はライモンティに来ていた。

「ふう～」

レイはベンチに座つて溜め息をついた。そして考え方に入っていた。

思い返してみると色々とおかしいと思うことが多々あった。まず、家族。連絡手段が無いとは言え1ヶ月も連絡がなければ不安がつて何か手を打つてくるはず。当然彼は家族のことを知らない。二つ目。それは外のことが珍しいと考えてしまうこと。記憶喪失だからかもしれないが、何もかもが珍しいものだと思っていた。そして三つ目。言われるまで気づかなかつたが、ポケモンバトルが強い（当の本人はらしいと思つている）ことが、確かに疑問であった。

（もしかして、どこかに閉じ込められていた？）

他にも色々あるが、これだけ思い出してみてもそう考えることが出来ていた。そう考えれば何故か納得している自分がいる、と思う

イであった。

「……考へても分からないままか

レイはそう呟いて考へることを止め、腕をほどくと隣で寝ているピカチュウの頭を撫でていた。と、同時に彼の頬に何か冷たい物が当たり少し吃驚した。それが離れたことを確認するとそれを当てる人物をジト目で睨みつけた。

「……何すんだよ？」

「いや、随分と難しい顔をしていたなあ、と思つて」

「ちょっとね、と付け足して言つてホワイトは手に持つっていた缶コーラの一つをレイにむけた。

「…………どうも」

無愛想にもレイはそう言つてそれを乱暴にひつたぐるよつに取つた。

ホワイトは少し吃驚していたが、彼の隣に座つもう一つの缶コーラを開け、

「…………ブツー？」

噴き出したコーラを顔面に受けていた。

レイはそれを見て呆れて溜め息をつき、少し離してそれを開けた。案の定、コーラは間欠泉のように少し噴き出した。その状態を見たレイは再びジト目になつてハンカチで顔をふきながら彼を見ている

ホワイトを睨みつけた。

「随分と乱暴にして持ってきたようだな？」

「アハ、アハハハハ……」

そう言われた彼女は苦笑して、『めんと言つてシュンとなつた。

レイは再度溜め息をつき、一気にコーラを飲み干した。

暫くしてホワイトも飲み終えた。そして、人込みを見ていてある人物が目に入つて見開いて驚いた。

(う……そ?)

三年前から探していた彼。忘れるはずもないあの人が今近くにいる、と考えたホワイトは立ち上がり走つていき、人込みに姿を消した。

「ちょ、ちょっとー?」

突然のこと驚いたのかレイも立ち上がるが、それと同時にピカチュウも目を覚まし、険しい顔つきをしてホワイトとは別の方へ走り出した。

「え、ちょ、ピカチュウー?」

レイは戸惑い、一瞬迷つていたが、すぐにピカチュウのあとを追いかけた。

「どこに行くんだよ、ピカチュウー!」

少し叫ぶようにレイは言ひがピカチュウは立ち止まらなかつた。周りが変な田で彼等を見ていたが、レイは一切気にしていなかつた。

「どこに行くんだよ！？ ピカチュウーー！」

まだ、分からぬまま……（後書き）

レイの「一」が噴き出したのは彼が乱暴にひつたくつた、といつの
もあるんですね……（苦笑）

再会、でも会いたくない（前書き）

因みに書かれておきますが、この章で用いられる語は原作とは並べません。予め書かせておきます。

ラストのほうは表現が少し生々しいと思します。何とかして、と書われても無理でした。

では、本編どうぞ。

再会、でも会いたくない

ホワイトは街中を走っていた。先程見つけた少年が自分が本当に探ししている人なのかどうか確かめたい。そしてもしそうならば、彼と話したい事がある。その一心で走っていた。

「どこに行つたんだろ?」

走っている途中で見失ってしまったのか、ホワイトは立ち止まってキョロキョロした。

(会える……、そう思つていたのに……)

ホワイトはがっかりして肩を落とした。

「ホワイト……」

不意に後ろから自分を呼ぶ声が聞こえ、ホワイトは振り返った。そこに彼がいた。

「やつぱりホワイトなんだね?」

早口なのは相変わらず。少し声が低くなつたことと背丈が高くなつたことを除けば3年前に会つた彼がいた。

「……」

呼ばれた本人は嬉しそうに言つてこむように聞こえたが、言つてい

る本人はその声がどこか悲しく聞こえた。

* * *

二人はすぐ近くのベンチに座っていた。暫く黙り込んでいたが、ホワイトが先に口を開いた。

「今までどこに行っていたの？」

彼女は開口一番に訊きたい」と言った。

「特に決めた場所はなかった。さらに強くなろうと黙つて世界のあちこちを見てきたんだ」

Nはすぐに答える。するとホワイトはまた質問する。

「どう思つた？　世界を見て」

「世界には色々なことがあるんだな、と思つたよ。この3年間だけでもあまりにも広すぎる。そして、自分も学ぶことがあつた少しは強くなれたかな、と思えるんだ」

相変わらずの口調の答えが返ってきて、ホワイトは少し安心していった。

「君はどうしていたんだい？」

「うん。私はあなたが心配で様々な地方に行って探していたの。まあ、それで色んな人に会えたけどね」

Nの問いに、ホワイトは彼と似たような答えを返す。

「君も世界を見てきたんだね」

「うん」

Nに対して静かに頷くホワイト。その田舎者のか悲しそうであった。そして二人は黙り込んでしまった。

「ねえ知ってるか？ 最近リゾートデザートで変な人を見るつて」

「あ、私見たよ！ あんなとこりでよくフード被つてられるなあって思つたけど」

「あそこは平氣だよ。寒暖差はそんなにないし」

「そうだな。俺も見たけど、以前にも見たことがある気がするんだよなあ」

「あ、それあたしも思つた。けど、どこで見たんだろう？」

二人の耳に聞こえた数人の学生の会話。偶然とは言え、ホワイトは好奇心を掻き立てられ、聞き入つていた。その様子を見ていたNは笑う。

「な、何？」

「いや、君は相変わらずだね、と思つて」

それを聞いたホワイトは少しムツとする。しかし、そんなことはお

構いなしに口は続ける。

「でも、君らしいね。どうするの？」

それを聞くと今度は不適な笑みを浮かべる。

「そりゃあもちろん……」

聞くまでもなかつた。立ち上がつた二人はリゾートデザートへと向かつた。

* * *

その頃、レイは……。

「いつたい、どうこういふことだ？」

彼は今、少し暗い路地にいて、目の前の光景に驚いていた。

そこには、ポケモンやそのトレーナーにあたる人々が山積みになつて倒れていた。しかも、焼け焦げた跡が見えれば、切りつけられて赤く鮮やかな血が流れているものも見え、分厚い氷に氷漬けにされているものも見えた。まだ息はあるのだろうか、うめき声をあげるものもいた。

このよつなことをして、その山の頂上にいるもの達を見て彼はこう言った。

「何故、このよつなことを…………？ ピカチュウ、リーフィア、グレイシア、……」

その声は怯えからか少し震えていたが、彼女達はレイを睨みつけて訴えているように見えた。

寧ろ、何故あなたは「いつしないの？」と……。

再会、でも会いたくない（後書き）

このこと、実はあまり覚えていないというのが現状……。こんな感じであつてしまつたつけ？

様々な方面での危機（前書き）

さて、また生きしい描寫があると思われます。しかし、結構重要なところもあります。

様々な方面での危機

「どうして……？」

ピカチュウ、リーフィア、グレイシアの目を見てレイは悲しく呟く。
「もしかして、これが僕だと呟つかのか？」

彼の言つことに3匹は静かに頷く。

「だとしたら、僕は何て残酷で冷酷な…………」

ヒトなんだ……、そう震えて消えいるように咳くと彼はその場から去つて行つた。そのとき、彼の瞳に涙が浮かんでいたことに気づいた彼女達は顔を見合させて慌てて彼の跡を追いかけた。

* * *

レイはベンチに座り、ぼんやりしていた。3匹は彼を心配する目で見ていた。

彼女達は忘れていた。そして、いつものことだと思つてやつたのだが、それが今回のような結果に陥つたのだ。

* * *

レイはピカチュウの跡を追つていた。然し、途中で見失い、あちこち探すこととなつた。人通りのない所を通つたそのとき、リーフィ

アとグレイシアがボールから勝手に出てきて、すぐ近くの路地に入つていった。その直後、電撃が見え、彼はすぐにその路地に向かつた。

「リーフィア！ グレイシア！」

そこを見る限りリーフィアとグレイシア、さらにピカチュウもいた。そして何人かのトレーナーと無感情で無機質のように見えるポケモン達もいた。そのなかには既に倒れているものもいる。

（どこかで見たことある？）

彼等を見てふと疑問に思ったレイだが、それどころではなかった。

数では圧倒的不利。そう思っていたはずだが、自分のポケモン達は一切やられていなかつた。然し、問題はそこではなく、彼女達の出しているパワーなのだ。何度かバトルはさせたがそのときは全く比べものになつていなかつた。ピカチュウは焼き焦がすように電撃を大量に放出し、リーフィアは腕の葉を巨大化させて相手を切りつけ、鮮血を飛ばさせ、グレイシアは相手を一気に凍らせる程に広範囲に吹雪かせた。

その様子を見ていたレイは唖然としていた。そしてたつた数分の出来事である。その戦いは終始彼女達の一方的な攻撃であつた。その短い時間でレイは本当の自分が分かつてしまいそうであつた。

「いつたい、どういつことだよ？」

* * *

「はあ……」

レイは溜め息をついた。それに3匹はびくつく。完全に落ち込んだ
レイに彼女達は声をかけずらくなっていた。

(あれが僕の姿、なのか……)

レイはわざと自分のことが分からなくなつていつていた。

「はあ……」

そして、本日何度も目が分からぬ溜め息をまたついていた。

「ほう。兄ちゃん、珍しいポケモンを持つているな?」

落ち込んでいて周りを気にかけていなかつた彼等は急に声が聞こえて顔を上げた。周囲は既にガラの悪そうな男達数人に囲まれていた。

「なつー!?

「おつと、動くなよ?」

レイは立ち上がるがすぐに別の男にナイフを首もとに突きつけられた。後数ミリで首に刺さるのでは、という距離である。ピカチュウは戦闘体制に入った。

「お前達は動くなよ?」主人がどうなつてもしらないぞ?」

ボス格の大男が彼女達に言う。そんなことはお構いなしに彼女達は目を合わせ、リーフィアがレイに向かって走りだした。

「う、動くな！ そう言つてゐるはずだ！！」

レイを抑えている男が多少焦りを見せて叫ぶ。然し、それでもリーフィアはその速度を緩めない。それどころかさらに増していく。

「ぐあつ！！」

男はナイフを離し、もう片方の手で押さえ込む。その手には急激な痛みが走り、切り傷から赤い鮮血が吹き出していた。そしてレイは彼から離れ、ナイフを空中でキャッチする。彼はその刃をしまってポケットに入れる。

「逃がすな！ 取り押さえろ！」

大男が他の男に向かつて叫ぶ。そしてレイの前に立ちはだかった。

「邪魔だあああ！！」

レイが叫ぶのと同時に3匹が男達に向けて技を出す。それは、先程に比べて威力は控えめだが、道を切り開いて男達数人を氣絶させるには十分であった。

「こまま逃げ切るよ！」

レイがそう言つと3匹も頷き、ボールに戻つていく。彼はそのまま走り続けた。

「ちい！ 待てえ！！」

男達も必死に追いかける。然し、レイの速さには追いついてなかつた。

(待てって言われて、待つバカがいるかよ！－)

番外編・初めての夏祭り！（前書き）

本編は途中ですが、ここでは番外編。本編とはあまり関係がないようつけてみました。でも、ネタバレ注意です。

うちの近くでちょっとしたお祭りが開かれているのでかいてみました。

では、どうぞ！

番外編・初めての夏祭り！

夏。といえば、やはり暑い。そしてジメジメする鬱陶しい。それが昼間だけでなく夜も続く日もある。それはここ、カントー地方等から離れたイッシュ地方でも同じことが言える。

しかし、夏には夏の楽しみといつものがある。プール、海水浴、お盆、それに伴う実家への帰省。受験生にとつては勉強の日々…………かもしだれない。そしてやはり、屋台が開かれる夏祭りがある。

ここ、イッシュ地方のカノコタウンはホワイトの出身地である。レイはその彼女の家の近くに座り込んでいた。

「こしても、夜だといつのに暑いね……」

流石夏、といひべきである。彼は普段着ている黒のジャケットを脱いで今は白の半袖のTシャツを着て、自分の手で顔を仰いでいる。近くで向かい合つようつて座つていてるピカチュウも首を縦に振つて頷き、同じようなことをしている。

「でも、今日はホワイドがお祭り連れて行ってくれるってね。僕、初めてだからどうこうものか楽しみだよ！」

レイは幼い子供のよひみ田舎を輝かせるよひみ田舎。それを見たピカチュウはにっこりと微笑んだ。

「お待たせ！」

そう言って彼の目の前に現れたのは浴衣姿のホワイトである。彼女が着ているのは青を基調とした様々な色の花火をかたどったものであつた。お腹には赤い帯が巻かれていた。彼女の姿を見たレイは顔を少し紅潮させ、そっぽを向いた。

「どうしたの？」

普段は見せないレイを見てホワイトは疑問に思つて訊く。

「あ、いや…。可愛いな、と思つて…」

「え…！？」

視線だけをホワイトに向けるレイ。彼女もまた、顔を紅潮させた。しかし、すぐにクスリと笑つた。

「ありがと！」

笑顔で素直にお礼を言つホワイト。レイは更に顔を赤くさせてうつむいてしまつた。

ピカチュウは彼等のやり取りを見て苦笑し、やれやれといつような仕草を見せた。

ホワイトは顔を赤くしながらもそれ以上に赤くしているレイの右手を左手で優しく握つた。

「まじ、早く立ち上がりつて！　お祭りに行くよー！」

「…うん！」

やつとの事でレイも立ち上がりつた。ピカチュウが彼の肩に乗ると二人は祭りが開かれているところに向かつた。

その場所はすぐ近くにあり、歩いてすぐのところに屋台の行列が見えた。

「うわ…すごいね、この人の数！」

レイはまず、その人の数に驚いていた。屋台の数、それらを営業する人々、そこに並ぶ人、屋台に挟まれた広い道を歩く人々。かなりの人数であった。

「そうね。でも、この町は小さいからまだ少ないほうよ？ 大きくなれば屋台に集まる人数も増えるわ」

レイはホワイトの説明を頷きながら聞いていた。

彼等はまず、バスラオ掬いをした。通常、バスラオは凶暴なポケモンとして知られているが、そこにいたのは非常に大人しく、更に通常よりも小型なので、小さな子供達にも人気があった。彼等は掬った後のバスラオは営業者に返していた。そして、水風船を取つたり射的をしたりしていた。射的の景品はレイの狙いがかなり正確だったのかポケモンをかたどったペンダントであり、歩いている途中でレイが水風船が割る、ということがあきた。

その後は木の実をかたどつた大きめの飴を舐めつつ、焼きそばやオクタン焼き、トルネロスとボルトロスの綿飴を食べながら様々な屋台を見て回つていた。そして…。

「うううう、ううう！」

「ちょっと、どこ行くの？」

ホワイトが急にレイを連れ出して屋台の行列から抜けた。暫く歩き、ある広場に出た。

「ここは？」

「ちょっと待って。もう少しだから」

ホワイトはライブキャスターで時間を確認しながら言つ。レイはどういうことなのか分かっていないのか、彼女にもう一度訪ねようとした。その時であった。

空が突然光り、そこに大きな花が咲いた。それはすぐに消えて見えなくなっていた。

「…え？」

何が起きたのかレイは分からずそのまま空を見上げる。すると、星空の中にまた一つ、また一つと花が咲いて光った。

「花火っていうの」

いつの間にか隣で座っていたホワイトが口を開く。彼女はレイに隣に座るように促し、彼はそのまま座る。

「ここ、隠れた花火の絶景ポイントでね。幼い頃、友人達とよく来て見ていたんだ」

ホワイトは懐かしむよ」元気。』

「祭り、どうだった?』

それをレイに視線を向けて言った。思ったよりも答えはすぐに返つてきた。

「楽しかったよ。それにこんなに綺麗なものも見れたし……。ありがとウー。』

最後に言つたお礼のときの笑顔にホワイトは少しドキッとしたが、どうこいたしましてと呴いて彼の肩に顔を置いた。

番外編・初めての夏祭り！（後書き）

時期的には8月前半の頃です。気づいたかたもいるでしょうが、本編の時期は第一章は6月中旬、第三章は7月中旬の頃のお話です。

さて、分かつてているかた多数だと思われますが一応説明。

バスラオ掬い：

金魚掬いです。本当はトサキントにしようか迷いましたが……。

木の実をかたどつた大きめの餌：

リング餌です。それを木の実に変えただけです。

オクタン焼き：

そのまま、タコ焼きです。イッシュにタコにあたるポケモンが見当たらなかつたので仕方なく……。

トルネロスとボルトロスの綿餌：

綿餌そのものです。

他には射的に使われた鉄砲はテッポウオやママンボウが使用されていましたというふうにしようかどうか迷い、結局しませんでした。

次回は本編をあげたいです。

驚きの再会（前書き）

久々の本編更新です！

驚きの再会

同じ頃、ホワイトは乙と一緒にリゾートデザートを歩き、古代の城に着いた。

「今まで特に変わった様子はなかつたけど、乙の中から微妙に違和感を感じる……」

「うん」

ホワイトは入り口で立ち止まり真剣な表情で乙に、「乙もそれに頷く。

二人は暫くその場に立っていたが、古代の城へと入つていった。

* * *

一方、レイはまだひたすら走り逃げ回つていた。

「ハア、ハア、ハア……。全くしつこい連中だなあ……」

彼は町の外に出ていた。辺りは砂が広がっているが、所々舗装されているのが見える。

「いたぞ！」

「あそこだ！」

「捕まえろ！」

跡を追つてきた男達が岩壁に手をついていたレイを見つけて一直線に突っ込んできた。

「一体どうにつけただよ…………」

レイは呆れてそう咳き、再び走り出せうとした。しかし。

「あつー！」

砂場に足を取られその場でこけてしまった。すぐに顔を上げて立ち上がろうとしたが、男達が既に近くにまで迫っていた。

「いまだ！！」

一人がそう叫んで男達は一斉に襲い掛かりうとした。もうダメだ、レイはそう覚悟し目を瞑つてしまつた。しかし、何時まで経つても彼には何も起こらなかつた。ふと目を開け顔を上げると、彼と彼等の間にワルビアルが立つていた。そして無言のままストーンエッジを繰り出し、男達を一瞬にして倒し気絶させた。

「なつー？」

レイは目の前の光景に驚き啞然とした。

ワルビアルはレイをその目で捉えると体の向きを変え、少しづつ彼に近づいていった。彼は身の危険を感じ取つたがその場を動けずにいた。ワルビアルはある程度近づくと腕を振り上げ、爪を大きくして振りかざした。

「止めるんだ」

後数ミリでレイの顔に爪が当たる直前、突然現れた男の声でワルビアルは動きを止め、レイから少し離れた。代わりにその彼がレイに近づく。

「大丈夫か？」

「あ、ああ…」

レイはやつと立ち上がり、服についていた砂を払い落とした。湿気が無く、砂はサラサラしていたのですぐに払い終えた。

レイはワルビアルを見ると、先程ピカチュウ達が徹底的に痛めつけていたポケモン達に似ていると感じ取った。そう、感情のない無機質で機械的のようなものであった。そしてどこかで見たように思え、悲しい気持ちに覆われていた。

(こいつたい、どうこいつことだ?)

疑問に思い始めたレイは警戒し後ずさりした。

「…………ほつ」

「…………?」

「成る程な」

「…………」

男が意味ありげに咳き、レイはさりに警戒心を強めて耳を傾けていた。そして、彼から聞いたことは意外なことであった。

「似ていると思いまや、まさか本人とはな……」

書きの再会（後書き）

さてと、久しぶりの本編でした。次は早めにしたいな、と考えています。

そして、この後書きにこれから次話のキー・ポケモンを出していきます。意味は簡単でポケモンの名前だけを出す次回予告みたいなものです。たまに意味をなさない場合もありますが、……。このことについて何か問題がある場合、理由も一緒にお願ひします。

では早速！

次回のキー・ポケモンはこれ！
フライゴン

仲間……？（前書き）

レイ「今回のキー・ポケモンはフライゴン。地面、ドライゴンタイプの精靈ポケモンと呼ばれていて、高さは2・0m、重さは82・0kgだよ。ビブルーバの進化系で、羽ばたく音が女性の美しい歌声に似ていることから砂漠の精靈と呼ばれているよ」

今回からこのようにキー・ポケモン、またはキーとなる技の簡単な説明を入れたいと思います。もしかしたら、分かっていることだらけでどうでもいいと思つかもしませんが……。

また、今回から後書きのところに次回予告を入れてみます。ただし、予告なしに内容が変更されるかもしれません。

それでは、本編をはじめ……。

仲間…………？

「似て……いると思……いきやまさか本人とはな…………」

「……？」

男が不気味にも不敵な笑みを浮かべてそう言つのでレイは流石に驚きを隠せずにいた。しかし、それでも黙り込んでいたもののその表情から動搖は隠せないでいた。

「知りたいようだな？」

「…………本当にことであれば、ね」

レイは相変わらず警戒したまま、しかし聞き耳をたてたままである。男は何か言おうと口を開くがすぐに口を閉じてまた開き、言いつ。

「いや、止めておくが…………」

「…………？」

「お前しかしらないものもあるからな」

「…………」

レイは男からの敵意が無くなつていいくのを感じ取ると警戒心は残してままであるが深呼吸をしてその場に座り込んだ。

「僕は、お前達とは何かしらの関係があつたのか？」

「ああ、大有りさ。何せお前は俺達の組織の一員だったからなーー！」

「えー？」

男は当然のように答へ、レイは驚き混乱し、思考が停止寸前までいくところであった。

(一体どうまで知っている…………?)

何とか頭を働かせようとしても混乱しているため考えられないでいた。

「記憶喪失、か…………。安心しろ、お前に被害を加える気はない」

「…………」

レイは黙り込んだままになり、彼を睨みつけるように見る。

「信じられない、か…………。ま、今じゃ当然だな」

男はワルビアルをボールに戻し、とある方向を指差した。レイもつられるようにその方向を見る。

「ここの先に古代の城といつものがある

「え？」

考えもしなかつたことをいきなり言われて驚き、レイは再び彼を見

る。男は腕を下ろして続けて言ひ。

「アリにお前が求めている答えが見えるかもな……」

セイドー曰切り、一呼吸おいて続けて言ひ。

「俺の名は砂巻勝也。覚えておけと書つてもアの「つか思」に出すかも
なお前なら、黒崎レイ」

男は自分の名を書つとボールからフライgonを出してそれに乗る。

「ま、待つてくれー」

「…………？」

レイは立ち上がり慌てたよつて勝也を呼び止めた。

仲間…………？（後書き）

- 次回予告 -

僕が彼を呼び止めたのはこここの砂漠があかしいと思ったからなんだ。

次回、リゾートデザートの異変。

次回のキースキルはこれ！

……砂嵐

次回もお楽しみに！

次回はオリジナルな設定が相当入ると思います。

リゾートデザートの異変（前書き）

レイ「今回のキースキルは砂嵐。岩タイプの変化技で5ターンの間、天気を砂嵐状態にする技だね。砂嵐がおきている間は岩タイプの特防が上がり、一部の技や特性に影響を与えるね。更には地面、岩、鋼タイプ、一部の特性を持つポケモン以外にダメージを少しづつ与えていくね」

この技を初めて見たときは地面タイプの技かと思ったのは今でも覚えています。にしてみるこの小説、バトルがあまりにも少なすぎる。

今回はオリジナル設定があります。

ソーシャルマーケティングの異変

「まあ、待ってくれー。」

「…………？」

レイはフライゴンに乗つて飛び立とうとする勝也を呼び止める。

「…………、本当に砂漠なのか？」

「…………ほつ、気づいたか」

勝也は多少驚いた顔をしてフライゴンに乗つたままレイに視線を合わせる。

「お前、砂漠の気候とこいつのを知っているな？」

「うん。基本的に雨が降らず、毎晩は口差しが強く照りつけて空気は乾燥している。毎晩は極端に暑く、夜は極端に寒くなるはずだ」

「」「なるほど。だが、今のところはどうだ？」

「夏の昼間なのが、涼しげじゃないと想ひ」

レイが着ているのは長袖のジャケット。それを着ていてもあまり暑いと感じていないのが今の彼である。

「まあ、やうだね。」「何とこいつか、知ってるか？」

勝也もまたレイに頷き、更に質問をする。しかし、彼は首を横に振った。

「ここはリゾートデザートといつ。最も、観光地ならともかく避暑地としては涼しいが砂嵐が強く吹くがな」

「今は吹いてないけど?」

「そのうちくるだろつよ、ずっとここにりやな

勝也の言つ通り、普段はここには砂嵐が強く舞つてゐる。しかし、今は風が吹いていなかつた。

「ここが何故リゾートデザートと呼ばれているのかは、昔は今のように避暑地と言つていい温度だったのだろう。だがあるとき、何らかの影響でここが他の砂漠と変わらない気候になつた。その後、三年前までずっとその気候が続いていたがそのときにこの地方で大きな事件があきた。それが白と黒の龍、幼き少女と少年の英雄事件だ。二人は戦い、結果的に白の少女が勝つた。その後、少年のほうは行方不明となり、少女のほうもその彼を探すことにした。丁度その戦いが終わつたときだ、ここが今の気候に急激に変化したのは。これがその英雄事件の影響かこの星の自然のサイクルかは分からぬが、観光地として有名なのは今も昔も変わらないようだがな。まあ、どういうことか生態系には影響がないよつだけどな」

「俺達には関係ないことなのかもな、ポケモンがどのような場所に勝也が最後の台詞を興味なさげに言つとフライゴンが少し羽ばつた。

「俺達には関係ないことなのかもな、ポケモンがどのような場所に

でも生きていられるのならば…………」

彼はそう言い残し、フライゴンは飛び去つて行き、姿は見えなくなつた。

「…………本当に、それだけでいいんだろうつか？」

一人残されたレイは彼が最後に残した台詞に違和感を覚えながら空を見上げて消え入るように呟いた。

リゾートデザートの異変（後書き）

次回予告。

古代の城に着いたレイ。その入り口で彼はヒビダルマの大群を目撃する。

次回、大群の襲撃！ VSヒビダルマ！

次回のキーポケモンはこれ！

……ヒビダルマ

次回は久しぶりにバトルになりそうです。しかし、かなりむちゃくちやなバトルです。

大群の襲撃！ VSヒビダルマ！（前書き）

レイ「今回のキーポケモンは炎上ポケモンのヒビダルマ。高さ1.3m、重さ92.9kgの炎タイプだよ。特性には力ずくとダルマモードがあつて、ダルマモードになると炎、エスパータイプに変化するね」

それでも特性は力ずくのほうが使い勝手はいい気がします。そして意外なことにそれなりに素早さが高く防御や特防が低いことに吃驚！ 攻撃が高いことは分かっていたんですが、見た目とは裏腹の能力値なんですね。あれ、こう思ったのは私だけですか？

大群の襲撃！ VSヒビダルマ！

「ヒートが、古代の城か」

レイは勝也と別れた後、リゾートデザートを歩き、古代の城の入り口に辿り着いた。そこは、何かしらの建物が砂に埋まり、その周りには十数個の石像が並んでいる少し殺風景な場所であった。

「…お腹すいた」

レイはそう言つなりバックの中を漁り、一口サイズの饅頭を取り出して半分程飲み込んだ。

「……っ！」

レイは突如、何らかの殺氣を感じとり、辺りを見渡す。すると、周囲にある石像全てが段々と赤みを帯び、次第にあるポケモンへと変化した。

「ひ、ヒビダルマの群れ！？」

軽く十匹は越えるであろうその数にレイは驚く。そして彼等はそのままレイに襲いかかつた。レイは若干焦りつつ、その襲撃を避けていき、残りの饅頭を飲み込んだ。

「一体どこのことだよー？」

驚きと焦りが混じる中、レイはピカチュウを出す。彼女もまた驚き

の色を出すが、すぐに戦闘体勢に入る。

ヒビダルマ3匹が拳に炎を纏い、炎のパンチでピカチュウに殴りかかろうとするが、彼女はジャンプしてそれをかわして尾に力を込めて硬くさせ、アイアンテールを振り下ろしてその3匹を薙ぎ倒した。その後、ピカチュウは空中で体勢を立て直して次に襲いかかってきた5匹に尾で作った球体のエネルギー弾、エレキボールで打ち落とした。しかし、彼女のすぐ傍にまで来ていた一匹がアームハンマーを振り下ろして、そのまま重力を利用して地面に叩きつけた。砂煙が舞い、ヒビダルマはすぐにジャンプでその場を離れる。

「ピカチュウ！」

レイは心配してピカチュウに声をかけるが幸いにもすぐに立ち上がり、砂煙が晴れていった。

（ここ）の砂が柔らかくクッションの役割をしてダメージを軽減したのか……）

レイはそう考えながら砂を払つよつて足を動かしてピカチュウとヒダルマを見る。

「電磁浮遊！」

ヒビダルマが頭から突つ込む体勢に入ったのを見るとレイは指示を出す。ピカチュウもそれに従い、ジャンプしてヒビダルマの頭突きをかわし、重力に逆らうように体を浮かせた。そのときの頭突きが地面にぶつかり、そのときのエネルギーが大きかったのか多少揺れはしたものその他ヒビダルマやレイが少しバランスを崩すだけであった。しかし、ピカチュウはその隙を見逃さず、ヒビダルマ全員に

強烈な電撃、十万ボルトを浴びせた。倒れるものが多くいたものの中にはまだ立ち上がる者とするものもいた。

「ボルテッカー！！」

レイの指示にピカチュウは一声あげて頷き、大量の電気を身に纏う。その量は凄まじくピカチュウが霞んで見えなくなる程であった。そしてそのまま群れに突進していった。これを受けて立ち上がるヒヒダルマはいなく、全員が戦闘不能となっていた。ピカチュウはそれを確認すると身に纏っていた電気を解除してレイの胸元に飛びついた。

「お疲れ様、ピカチュウ…………」

飛びついてきた彼女にレイは頭を撫でながらそう言つ。ピカチュウも嬉しそうに目を細めてレイに頬擦りをして甘えていた。

大群の襲撃！ VSヒビダルマ！（後書き）

次回予告

古代の城に入ったレイはある問題に突入。それは、構造が分からず迷子になってしまふということだった。

次回、ゴメンナサイ。

次回のキー・ポケモンはこれ！

……ピカチュウ

さて、もの凄く人々のバトルシーン。にしてもバトルをしたのってまだ数えるくらいしかない？ そしてピカチュウは無双していた気がします。

『メンナサイ（前書き）

レイ「今回のキー・ポケモンはピカチュウ。静電気の特性を持つ電気タイプの鼠・ポケモンだよ。高さは40cm、重さは6.0kgといふ小さくて可愛らしいポケモンだね。警戒心が高く頭もいいポケモンみたいだよ。ところでピカチュウ、こんな黒焦げになつたんじゃあこの木の実が食えないんだけど……」

でも怒っているわけではないレイです。アニメでもお馴染みの主人公・ポケモン。ポケスペでもレッドやイエローが使っていた主力級のポケモンですね。他にも色々なポケモンの漫画にも出ていますね。ポケモンの中でも最も有名なものの一種だと思っています。

さて、突然なんですが諸事情により次回予告等は一度休止します。申し訳ございません。

では、本編どうぞ。

「メンナサイ

「…フウ」

レイは暫く突つ立つて立つたが、すぐに溜め息をついてその場に力が抜けたように座り込んだ。

「何か凄く怖かっただし疲れたんだけど…………」

レイは気が抜けていき、両手を地面につけて深く息を吐く。ピカチュウも彼の言つてることに同意するように頷いていた。

「こしても何で急に襲つてきたんだろう？」

総勢10匹以上のヒビダルマ。ピカチュウが戦つている間は彼女への指示と状況把握で頭がいっぱいになつたレイだが、こうやつて戦いが終わるとその疑問にぶつかった。余程気になるのかその場で考え出すレイだが、そんなこと勿論分かるはずがない。それを見かねたピカチュウはレイのバックの中に入り、漁るとある一つの袋を取り出した。

「怒り饅頭？　でも何でまたそんなものに……」

謎は深まるばかり。余計に考えるレイを諦めなさいと諭すよじピカチュウは彼の肩を叩く。

「…仕方ないか」

レイはそう言ってピカチュウからその袋を取り、それを一番近くにいたヒヒダルマに握らせる。そしてピカチュウをボールに戻して遺跡の入り口まで移動し、そして振り返った。

「……」めぐなさい

レイは消え入るようになっていた、遺跡へと足を踏み入れた。

暫くの後、この場一帯からヒヒダルマの姿は消え、レイが来たときの風景に戻っていた。

* * *

「どうこう造りになつてゐるんだ、これ？」

レイは遺跡の中で座り込んでいた。中は意外と広く、彼はそう、迷つてしまつたのだ。

「あー、どうしよう？」

レイは誰かに向かつてではなく天井を見上げて叫ぶ。そこから砂が重力に沿つてパラパラと降り注いでいた。

この古代の石城は意外と頑丈な造りになつてゐるらしく、崩れているところは少なかつた。その崩れているところには穴が空いていてそこから砂がゆっくりと降り注いでいた。

「ま、休んでいても仕方ない。先進も」

レイはそう言って立ち上がり歩き出しだが暫くして、

「……………」

更に迷ひこしまつたようだ。

彼はここに来たのは勿論初めての上、ここに来るまで適当に歩いただけであった。更に悪いことにここに来るまで人に会っていないので道も聞けない。見たのは野生ポケモンだけである。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

もう自暴自棄になつたのかレイは大声で叫んだ。周りにいたワルビルやテスカーン達は突然のこと驚きびくつく。が、レイにはそんなことは見えていなかつた。

水の導き（前書き）

すこくお久しぶりです。暫くの間、投稿できずになりました。無断で
いたことにお詫び申しあげます。とは言つても、この小説を楽しみ
にしてくれている人がいるのかは疑問な所ですが…。

「あれ…？」

古代の城の中であちこちをも迷っていたレイはとある一つの石室にやつてきた。彼はそこに戸を少し叩く。

「床に砂が無い。それに、この辺りから壁がかなり頑丈な造りになつてきてる」

彼はそう言つて辺りを少し見渡すとまた前に進んでいった。そして少し進むと今度は奇妙な光景を目にした。

「…」
「…」

そこにいたのはフードを被つた一人の男とミルホッグやレパルダスが倒れているというものだった。レイが彼等の状態を確認しようとした。近づこうとして歩を進ませたとき、何かを踏んだことに気づいた。

(…水?)

辺りを確認してみると所々少し濡れている。

(誰かと戦ったのか？ にしてもこの一人もポケモン達もそこまで傷が無い。それに、気絶してるだけだ……)

レイは彼等に近づいて状態を確認し、立ち上がる。

「兎に角、先に進んでみるか……」

レイはそう呟き、別の部屋へと進んでいった。

しかし、どれだけ先に進んでもどの部屋にも同じような光景が見えるだけだった。

「どうなっているんだ？　どの部屋にいつても何人かの同じ服装の人達やポケモン達が倒れているだけだなんて……」

レイは多少焦つたように呟く。それでも何とか氣を落ち着かせようとレイはその場で少し休もうとした。そのとき、爆発音が聞こえ、その場が一瞬だが揺れた。

「……！　何だ、今の寒気は！？」

思わず大声を上げるレイ。彼はそのまま辺りを見渡す。

「何だつたんだ、今のは……。それにさつき感じた寒気、それと妙に体が反応するこの異常な力は……何だ？」

立ち上がったレイはその部屋を後にした。

* * *

「惑ひりぐ、この辺りだと思つたんだけど……」

ある程度進んだレイはある部屋で立ち止まつた。そこで再び爆発音が聞こえた。

「…隣か！」

レイは隣の部屋の入り口の壁際に密着する。

(……何か言い争つてるな。一人は老人、一人は青年、か? だけ
ど、煙が酷くて状況が確認しづらいし、言つてることも聞きづら
い)

レイはどうしようか迷つてゐるときだつた。彼の耳に聞き覚えのある声がはつきりと聞こえた。

「いい加減にしなさいよ、またそんなことを繰り返したいの! !」

(え、ホワイト? まさか、彼女もこれに関係してゐるのか…?)

変化の兆し

（彼女がここにいるなんて……。どうしたことだ？ それに、この部屋から異常な力を感じる……。そして何だ？ この妙な違和感は……）

レイは壁際で隣の部屋の様子を伺っていた。

（くそつ！ 煙の舞が酷くて状況が確認出来ない。かといって、部屋に入るにはかなり危険だし……）

レイは部屋を確認しながら、中に何がいるのかを確認していった。

（レシラムにゼクロム、キュレム。何でこの3体がここに？ それに対峙するようにいるウルガモスも何かおかしい。そして、ホワイトと男性のポケモン達は体力をかなり消耗してるのに対し、老人のほうはそういったところが見えない。どうなっている？）

煙もだいぶ晴れてきたのか、レイは状況を改めて確認する。戦況はホワイト達の不利であろう、と彼は考えていた。そして、煙が完全に晴れきった頃、老人の声が響く。

「ほつ、どうやらネズミが一匹迷い込んだよつだな」

「え？」

「誰……？」

(気づかれた！？)

レイは内心で焦る。ホワイトと青年はその部屋の唯一の入り口を見る。が、何も起こらず、再び老人のほうを向く。

「何もないじゃない！」

ホワイトがそう大声で言つと老人は不敵に笑つた。

「隠れていな」で出てきたどうだ？ ゼニにいるのは分かつているんだ」

老人は再び誰もいないはずの入り口に向かつて言つ。そことの壁際にいるレイは一息つくと漸くその部屋に入った。

「……！？」

レイは部屋に入った途端、目を見開く。そしてウルガモスと老人を何度か見る。

「レイ、どうしてここに……？」

レイが現れたことによつて、ホワイトと青年は驚く。しかし、レイは黙り込んだままだつた。

「ホワイト、彼は誰なんだい？」

「Ｚ……。彼はレイ。とある理由で私と一緒にいるトレーナーよ」

青年、Ｚが尋ね、ホワイトはそれに答える。しかし、二人は何故彼

がここに来たのかが分からなかつた。

(「この部屋に入つてはつきりと分かつた。あの老人から発せられる力がウルガモスと共に鳴して異常なまでに大きくなつてゐる。しかし、何故だ？　この力に体が反応してゐる……）

レイは自分の手足や体のあちこちを見回す。そして、自分の体に起きている異変を探つていた。

「貴方はレイと申つのですか。初めてまして、私はゲーチスと言います」

老人、ゲーチスに声をかけられ、レイは探ることを止める。

「ところで、何故貴方は此方へ？」

「……ある人や水の導きによつて、ところかな？」

レイはそう言ってホワイト達のほうを向く。よく見ると彼女達も所々ボロボロである。

「レイ、気をつけて！　理屈は分かんないけどそのポケモンにダメージが『えられないのよーー』

（ダメージが『えられない……？』）

レイは氣になりもつ一度戦況を見る。

「よく分かつてゐるではないか。では始末にかかるとしよう。テスカーン、まずは今来た少年をやつてしまえ！」

ゲーチスの指示を聞き、テスカーンはレイに向かっていった。

「そ、そんな……！」

「レイ、逃げて！！」

太陽の加護と月光の加護

「レイ、逃げて！！」

「！！」

デスカーンはゲーチスの指示を受けレイに突撃する。然し、レイはそれに動じることなくボールを投げた。

「ピカチュウ、アイアンテールで迎え撃て！」

そこから出てきたピカチュウはすぐに尾を硬質化させてデスカーンに叩きつけた。そして、壁まで吹っ飛んでいった。

「え……？」

「何！？」

「嘘……」

レイ以外の三人は驚きの声をあげる。彼等はピカチュウが負けると思つただろう。だが、実際はどうだろうか。現にデスカーンはピカチュウのパワーに押し返されて戦闘不能となつていた。

「貴様……、何をした！？」

ゲーチスの声と表情に焦りが見える。それもその筈だ。こちらには一切通じないと思われた攻撃が効いたのだから。然し、当の本人も

何事が分かつていないうつだ。

「ちい。 サザンドラ、 龍の波導で狙い撃て！」

サザンドラは即座に青いエネルギーを口に溜め、それを白い螺旋状にして放つ。然し、それが発射された頃にはピカチュウはそこにはおらず、既にサザンドラに飛びついていた。

「何だと…？」

ゲーチスは驚くがそれに気づくのは遅かった。時間を置かずピカチュウは既に強力な10万ボルトを放つた。それを避けられる筈もなかつたサザンドラはその直撃を受けて呻き声をあげていた。

「まだだ……」

その様子をずっと見ていたホワイトは小さく呟いた。

「また、 て……、 何がだい？」

それを聞いたNが彼女に訊く。

「以前にもあった。レイのポケモンが彼の指示無く動き、攻撃したのよ……」

「言われてみれば……確かにそうだ！」

ホワイトの疑問。それにNも同意する。

(黒崎レイ。……貴方は一体何者なの?)

ホワイトは更に疑問を募らせていった。

ある程度経つと電撃の猛攻が止んだ。

「ピカチュウ、瓦割りだ！」

彼女は即座にサザンドラから離れ、尾に力を込めて彼に叩きつけた。サザンドラが壁に叩きつけられ、床に落ちると同時にピカチュウも床に降りた。

「貴様、まさか月光の加護を持っているのかー？」

「月光の、加護？」

ゲーチスは更に焦り、レイにあることを聞いた。当然、レイは何のことか分かつていなかった。

「何、それ？」

「聞いたことがあるよ」

「N？」

ホワイトも分からぬようでゲーチスに訊くが、Nには聞き覚えがあつたようだ。

「太陽の加護と月光の加護。どちらもダメージを受けた瞬間に体力を回復させていく特殊能力だ。その力を打ち消すにはそれぞれの逆の力、太陽なら月光をぶつけて消すことが出来るんだ」

「でも、レイは今までそんな力を使ってなかつたような……？」

「多分、それは彼の持つ力が余りにも強いからだと思つ。この力は余りに強いと力 자체が勝手に制御を行つて相手が持つていてるか否かによつて使われる、と聞いたことがある（それに、僕の予想だけど彼は太陽と月光の両方の力を持つていてる）」

Nはそこで一旦切つて話を進めた。

「でも、僕にとつては父さん、いや、ゲーチスのほうが疑問だ。何故そんな力をもつていてる！？」

「フン、当然のことか。私のこの力はある人物の治療によつて授かつたものだ」

「その人物は一体誰！？」

「残念ながらそれは言えんな。この力はまだ小さいほうだがそれでも十分だ。お前達二人を仕留めるくらいはな！！」

「くーーー！」

「まずい！！」

ホワイトとNはすぐに別のポケモンを出す準備をする。然し、レイはその中でも至つて冷静だつた。

（成程ね。幾ら紛い物で小さな力だつたとしてもそれに対する力を持つていない一人を仕留めるのは十分。さらに太陽ポケモン、

ウルガモスがいるから太陽の加護はさらに力を増した、ということ
か……）

そして、彼の口元が微かにだが笑つたように見えた。

太陽の加護と月光の加護（後書き）

何か変なものを出してしまった。後悔も反省もしていませんが……。まあ、後々重要なので覚えておいて下さい。

響け、輪唱！ 勝利に導け！！

「ホワイト、一つ相談があるんだけど……」

「レイ……、何？」

レイは彼女達に近づきながらホワイトに声をかける。

「あのウルガモスをビックリしてこの場から消すことは出来ない？」

「け、消す！？ あのウルガモスを？ この部屋から出すにしてもあの入り口じゃ狭いし、こんな所をぶつ壊すのも時間がかかるし、もし壊せたとしても全体が崩れるかもしれないし……」

「ああもうー ホワイト、落ち着いてー！ 第一、ここに崩したら色々問題になるよー！」

レイの突然の提案にホワイトは慌てふためく。それをNは何とか宥めていた。

「モンスターボールで捕まえることが出来れば！ 幸い、あのウルガモスはまだ野生だし」

「でも、その問題はあいつをどうやって弱らせるかよ？ 私のレスラムとゼクロム、貴方のキュレムが力を合わせてもダメージを与えられないのよ？」

「いや、その必要は無いと思つ」

Nの提案は最もだ。然し、今まで彼等の持つ伝説と称されるポケモンでさえもウルガモスにダメージが与えられていない。それをレイはあるものを取り出して必要ないと言った。当然一人はえつ、という顔で彼を見る。レイはそれをホワイトに渡しながら囁く。

「これを使えば一々ダメージを『えずとも捕まえられると思つよ~』

「これって……マスター・ボール！？」

彼が渡したのは上半分が紫色で前の部分に少し大きめにMとイニシャルの入ったボールだった。

「り、理論上はそうだけど何で貴方はこれを持つてるの？」

「知らん。君に助けてもらつたときには既にあつた。ただそれだけだ」

レイはそう答えるしかない。何故なら、彼は記憶喪失なのだから。

（あいつが相当苦しみでるようになつていて、ついに言えないもんな……）

彼は密かにそう思つていた。

「と、兎に角、僕達で何とかしてみよう。キュレム、あいつに隙を作つて！ 凍える世界！」

「さうね。レシラム、青い炎！ ゼクロム、雷撃！」

「無駄だといつたことが分からんか！ キリキザン、ガマゲロゲ、シリルドン、行け！」

ゲーチスも負けじと次のポケモンを出していく。

「ピカチュウ、キリキザンの相手を頼む！」

彼がポケモンを出したことに気づいたレイは足下にいたピカチュウに指示を出す。彼女は頷いて物凄い速さで彼等に向かった。そしてレイは他の2匹も出す。

「グレイシアはガマゲロゲを、リーフィアはシビルドンを頼む！」

それぞれボールから出てきた彼女達はレイの指示通りに向かっていく。

「ちい。キリキザンは辻斬り！ ガマゲロゲは泥爆弾！ シビルドンはワイルドボルト！」

ゲーチスはそれに指示を出す。然し、ピカチュウ達はそれらを難なくかわし、ピカチュウは電撃波を、グレイシアは氷の息吹を、リーフィアはマジカルリーフを当てる。彼等が戦っている隙にレイはゲーチスに近づいていった。そしてある程度近づくと立ち止まる。

(この人、どつかで会ったことがある？)

レイはそんな疑問を持っていた。

「お前、何者だ？」

「えー？」

「何者だときいているー。」

ゲーチスは自分のポケモン達に指示を出しながらもレイに疑問をぶつける。少し間を置いて彼はこう答えた。

「黒崎レイ。記憶を失った、普通のトレーナーだよ？」

(黒崎……だと…?)

彼の名前を聞いたゲーチスは驚いた表情になる。それと同時に途端に膝をついた。

「な……、ウルガモスが捕まえられただと……？」

彼はウルガモスが戦っていた場所を見る。そこには既に彼はいなかつた。これを好機だと見たレイは

「輪唱ー。」

と、大声で言った。その後、ピカチュウが歌を歌うような声をその部屋に響かせた。それに続くようにグレイシア、そしてリーフィアが追いかけるように似たような声を響かせる。それがちこちに反響してホワイト達は悲鳴をあげて耳を塞いでいた。30秒程したところでそれが止んだ。

「ぐう……、な！？」

何とか回復したゲーチスは自分のポケモンが戦闘不能になっているのが見えた。

「貴方の最後のポケモンのボールの開閉スイッチも破壊しました」

「何つ！？」

先程の輪唱のときにゲーチスの背後に移動していたのか、レイの声が聞こえ彼は最後のボールを確認する。それは足下に彼の足下にあり、レイの言う通り開閉スイッチが破壊されていた。

「ウルガモスがいない以上、貴方の太陽の加護も元の大きさに衰退するでしょう。……貴方の負けです」

レイはただ静かにそう言った。

二年越しの決着

その後、ゲーチスは国際警察に連れていかれた。

「これで、七賢人みんな捕まつたか……」

遺跡から出てきたホワイトは空を見上げて言つ。田は傾き始め、空はほんのり赤く色づいていた。

「にしてもよかつたのかい？ 僕をほつといて」

「うん。それに、貴方と話したいことがあつたから」

「そつか。と言つても、僕もなんだけどね」

二人は向き合つて話していく。

（僕つて邪魔者だよね……、多分）

その様子を見ていたレイは声には出さずともやう思つていた。

「強くなつたね、ホワイト

「そりや、三年もあれば……。乙だつて十分強くなつたじゃない

「フフッ、ありがとう。でも、君のまつこセレシラムだけじゃなくゼクロムも扱えてるじゃないか！ 君に託して正解だつたよ

「そ、そんなことなによ……」

互いに口を讐め合ひ、ホワイトは顔を赤くして照れていた。

「君達を見ていって、安心したよ」

「え？」

「君、達？」

乙は笑つてそうつまご、ホワイトとレイはポカンとしていた。

「君の隣にいるのは、もう僕じゃないんだよね……」

「じつねん、」と

「ま、待つてよ、乙ー。」

「受け取れ、ホワイト」

彼女もそれを追いかけようとするが、乙が何かを投げ、それを受け取ることで足止めされてしまつ。それはボールだった。

「キューレムの」とを頼んだよ、ホワイト。……やつならだー。

乙が明るくさう言つと突如としてその場に強い砂嵐が巻き起こつた。彼等は咄嗟に腕で顔を隠す。少しことではあつたが、それが晴れ

るところに止めた。既に口はいなかつた。

「…………」

彼から渡されたキューレムの入ったボールを見ながらホワイトは静かに言つ。

「ホワイト……、大丈夫？」

ホワイトは振り返る。そこには心配そうな表情で彼女を見るレイの姿があった。彼女は彼を見て急に抱きつき、声をあげて泣いた。突然のこと驚いたレイだったが、彼女を無言でしっかりと抱きしめた。

二年越しの決着（後書き）

さて、これで第三章は終わりです。少し長かった気がします。

後、出来れば感想がはつきり言って全く同じでいいほど無いので、アドバイスでもいいのでお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6632t/>

降り積もる梅雨

2011年12月19日17時56分発行